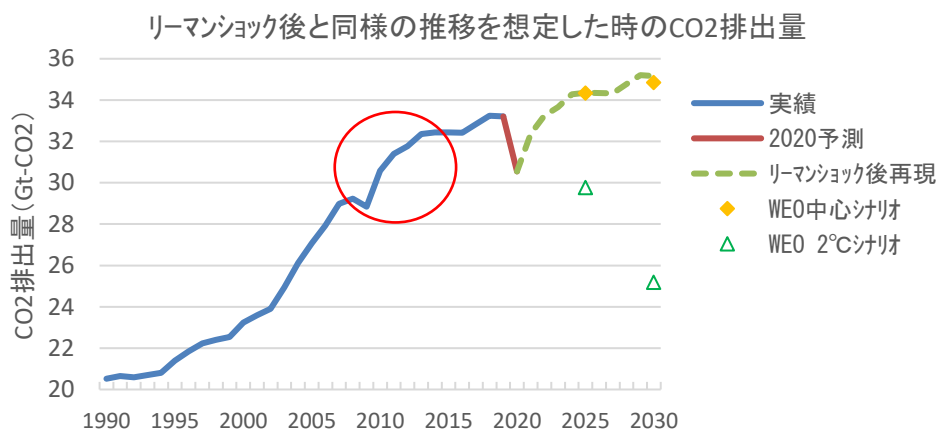


国際エネルギー機関（IEA）が 2020 年 5 月に発刊した Global Energy Review2020 では、新型コロナの影響により 2020 年の CO2 排出量は前年比で約 8%減少すると予測していました。以下は、筆者が同報告書の概要と考察を [IEEI へ寄稿](#)して、その中で 2020 年以降の CO2 排出量を試算したものを示したものです。

（2020 年の IEEI 寄稿より）

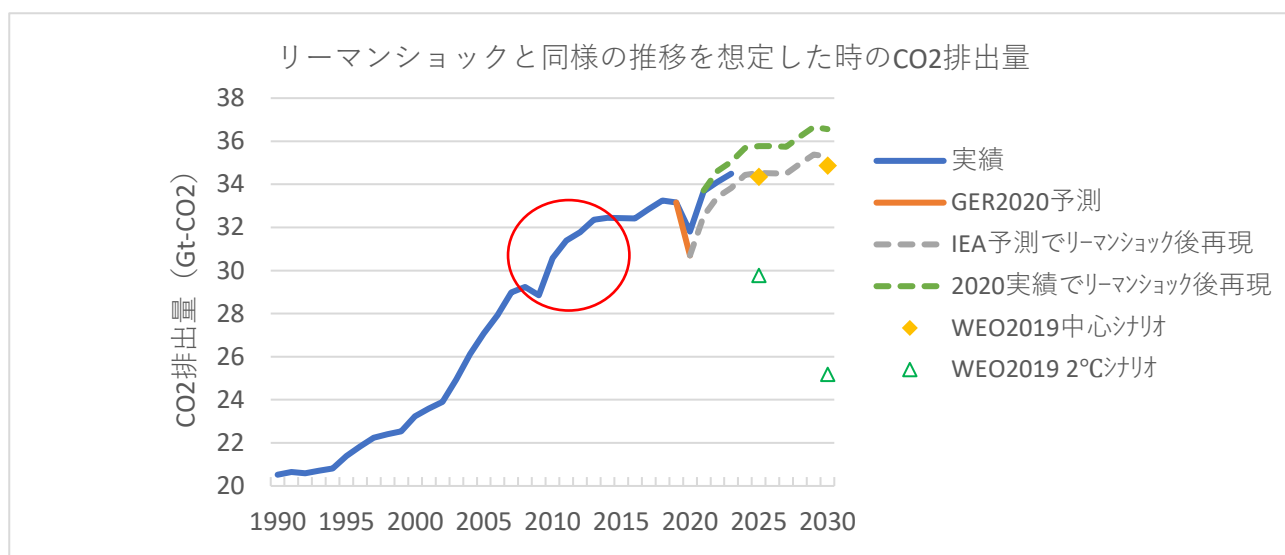
前例として、リーマンショックの時の CO2 排出量の変化を見てみると、2009 年には前年比で 1%減少するが、翌年には 6%の増加に転じ、翌年は 3%の増加、その後は 0～2%の間の増加率で推移している。あくまで一つの仮定であるが、コロナ禍による 2020 年の減少の後、CO2 排出量がリーマンショック後と同様の年変化を辿ると仮定して 2030 年までを試算すると、下図の破線のようなになる。



IEA CO2 Emissions from Fuel Combustion 2019, World Energy Outlook 2019 から作成

WEO2019 の中心シナリオの 2025 年、2030 年の CO2 排出量は、この仮定による試算カーブに乗っている。（中略）しかし、経済回復のペースが同じであったとしても、エネルギー供給・需要の両面で低炭素化は進んでいることから、実際の CO2 排出量はこの破線カーブを下回ると考えられる。

「2020 年の CO2 排出量は約 8%の大幅低下」という IEA の予想に反して、実際の排出量は前年比 4.1%の低下に留まりました。この 2020 年の実排出量をベースとして、リーマンショック後と同じ変化を辿ると仮定して 2030 年までの排出量を試算した結果と、2020 年から 2023 年までの CO2 排出量を追加した実績値を、上のグラフに追加したものを以下に示します。



このように、2020 年の排出量実績をベースにリーマンショック後と同様に推移すると仮定した試算値に比べて、実際の CO2 排出量は下回っていることが確認できます。つまり、5 年前の「経済回復のペースが同じであったとしても、エネルギー供給・需要の両面で低炭素化は進んでいることから、実際の CO2 排出量はこの破線カーブを下回ると考えられる。」という筆者の想定は、妥当だったようです。

コロナ後の CO2 排出量は、試算値を下回ったとは言え、増加に転じており、継続的に減少していく 2°C シナリオには程遠い状態です。もちろん、2°Cシナリオにほど遠いのですから、1.5°Cシナリオには更に遠いことは言うまでもありません。(IEA が 1.5°Cシナリオを初めて示したのは 2020 年 10 月で、当時は 2°Cシナリオが理想的なゴールとして描かれていました)

CO2 排出量は経済成長との相関が極めて強く、パリ協定にも EU タクソノミーのような脱炭素政策にも影響を受けたことはない、ということを歴史は示しています。仮に、2019 年から 2020 年にかけてのコロナ禍による CO2 排出量減少率を今後ずっと継続するとしても 2050 年の CO2 排出量は 3.2 億トンであり、ゼロには届きません。2050 年カーボンニュートラル (1.5°C目標) を達成するには、3.2 億トンの CO2 排出を CCUS で除去してゼロにすることは、可能かもしれません。しかしそれ以前に、コロナ禍で経験した未曾有の経済減速が今後 25 年間継続することを、世界中の国が合意して選択する、ということが条件になります。

以上が、データが示すコロナ禍後の世界の CO2 排出量の実態です。